法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

キャリアデザイン学部新入生オリエンテーション講演 ： 大学生として、豊かな学びとつながりを創りだそう

佐貫，浩

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン
(巻 / Volume)
8
(開始ページ / Start Page)
123
(終了ページ / End Page)
135
(発行年 / Year)
2011-02

Hosei University Repository

キャリアデザイン学部新入生オリエンテーション講演

大学生として、豊かな学びとつながりを創りだそう

2010年4月24日　法政大学キャリアデザイン学部教授　佐貫　浩

今日は、皆さんの入学を歓迎するとともに、このキャリアデザイン学部でどのような学びと生活を展開してほしいのかについて、皆さんを迎える教員の側からの希望や期待を話そうと思います。

(一) 生きることの難しさが人間を取り囲んでいる時代

問題を率直に語ろうと思います。今、わたしたちの前にある困難と希望とを、取り分けてその困難について、それはいったいどうしてなのかを含んで考えてみたいと思います。それは、この困難を見つめることから希望を切り開かなければならない――それを避けては希望を語り得ない――歴史的地点に、今わたしたちが置かれているのではないかと考えるからです。

最初に、人間として生きることの難しさ、その生きづらさについて考えてみましょう。「おまえなんか生きている価値がない」――この厳しいメッセージが、多くの子どもたちに、突き刺さるようにして投げかけられているのではないでしょうか。「おまえの存在価値を証明せよ」「おまえにはどんな価値があるか答えてみろ」というような性急な問いつめにさらされて、子どもも、そして皆さんも、「わたしの価値はここにあります」という存在証明証を獲得するために、必死に日々を生きてきたのではないでしょうか。そういう、子どもにとっては残酷ですらある問いかけが、今、子どもたちをたびたび襲っているのではないかと思うのです。

子どもは本来その存在証明を外から求められることのない、無条件にその存在を受け入れられ、喜ばれる存在なのです。したがってまた子どもが自分の存在に見切りをつけて自殺するということは起こりえないはずなのです。親は、なぜおまえがここにいる価値があるのかと子どもを問いつめることはないはずなのです。地域の共同体にとっても、子どもがたくさんいることそのものが、そのコミュニティーの希望として把握されていたのです。しかし現在では、勉強ができない、成績が悪い、次はもっとよい点数をとらないと許さない、親の期待に応えろと、と矢継ぎ早に子どもに要求を突きつけ、その期待に応えられない子どもには、「おまえなど生きている価値がない」という残酷なメッセージが向けられてしまうようになっているのです。そういういわば精神的な他殺が積み重ねられる中で、時には、子どもは自殺をも選び取ってしまうのです。子どもの自殺は繰り返される精神的他殺の結果に他ならないのです。

子どもが、幼い頃から自分の存在証明を性急に求められる過酷さを、日本社会はもう

Hosei University Repository

40年以上も前から持ち続けてきました。人を時には死に追いやるほどの残酷なメッセージに対抗する戦略を日々積み重ねながら皆さんは、それぞれに生きてきたのではないかとも思うのです。それは、具体的には、競争に勝ち抜ける自分を作り続ける日々であったり、よい子を演じる苦しい日々であったり、みんなの中で居場所を確保するための「優しい自分」、みんなに受け入れられるキャラを演じる努力であったりしたのではないでしょうか。

もちろん、ここにいる皆さんは、法政大学にはいるというハードルを越えたことで、今は、自分の存在証明を達成して安堵している時期なのかもしれません。しかし皆さんの心のどこかには、しばらくの猶予期間（モラトリアム）の後にすぐ、就職難という中で、もう3年生にもなれば、この重い問がまた襲いかかって来るのではないかという不安感が漂っているのかもしれません。

近代に出現した青年期とは、幼児から少年期における"受け入れられる自分"をいっぱいためて成長した若者が、初めて世界から、おまえは何のために生きているのかという問いを突きつけられ、社会の中に自分の意味を再定義していく苦しくもまた冒険に満ちた、自己否定を繰り返しつつそれを超えて自己を肯定する新たな地平を切り拓く、苦悩と希望に満ちた成長の時代です。親や家族や地域に深く受け入れられたという体験、受動性を満たされた満足感をもって、若者は、自分の存在証明を他者から問われる青年期というまさに人格的な危機の時代、第二の人生の出発点に能動的に向かっていくことができるのです。

しかし現代の子どもは、その受動性を満たしてくれる空間の中で様々な冒険を試みる余裕を与えられないままに、性急な存在証明を求められて、大人や競争社会が提示する評価基準に自分を適合させることに莫大なエネルギーを費やしてきたのではないでしょうか。そして皆さんにとっては、何よりも勉強が、受験勉強が、そういう自分を証明するための方法だったのではないでしょうか。しかしそういう存在証明は、いわば瞬間瞬間の効力しか持たず、絶えず次のステージに向けて、より新たな、よりハードルの高い存在証明の課題が突きつけられ、「おまえの価値を証明してみろ」と絶えず課されてくるような性格を持っていたのではなかったでしょうか。そういう自分を証明する努力が小さい頃から今に至るまで、絶えず性急に求め続けられてきたことにこそ、現代の生きにくさの本質があるのではないでしょうか。

しかしそれにもかかわらず――あるいはそうだからこそというべきだとわたしは考えるのですが――、自分の存在証明のための皆さんの努力は、皆さんを自立させ、主体化したのではなく、むしろ皆さんから主体性を奪ってきたのではないかということを考えてほしいと思うのです。その具体的な意味については、これから触れていきたいと思いますが、最初に率直にそういう疑問を、皆さんに問いかけたいと思います。そして本当の自分の人間としての存在証明とはどういうものであるかを考えてみたいと思います。

（二）社会の困難――社会的に作り出された生きることの難しさ

皆さんが直面している生きにくさの背景にはもう一つの要因、ある意味でより根本的で客観的な要因があると思います。それは皆さんがこれからはいっていく日本社会、大人として参加しなければならない社会が、存在証

Hosei University Repository

明ができない人間は無用というメッセージを皆さんに向けているということにあるのではないでしょうか。しかもそこにはここ数年、新たな過酷さが組み込まれてきています。

ワーキングプアが1000万人を超え、年収200万円という低賃金ではまともに生きていけないにもかかわらず、青年の雇用は、半分近くがそういう不安的な非正規雇用になってきています。個性のない、他人と比べて価値のない人間は、社会から無用だというメッセージが、これほど残酷に青年を襲っている状況は、今までの日本社会ではなかったことです。どうしてそうなったのでしょうか。

その点については、わたし自身は、団塊の世代の一員として、皆さんに謝るほかないとすら思っているのです。わたしたちの世代は、多くが終身雇用に入り、年功賃金を獲得し、その下で、結婚し、子育てをし、住宅を持ち、老後への備えを獲得してきました。しかしそういう仕組みがこの15年ほどの間に、日本社会から失われていきました。わたしたちすらもそのことに気がつかないうちに、それらが喪失されていくことを防げませんでした。そして自分たちが高度成長の豊かさを味わってきたそういう社会を、もはや皆さんに残しておくことができなくなったことに、ようやくここに至って気がついたというべきでしょうか。いったい何が変わったのでしょうか。

＜日本の企業が世界競争に勝ち抜くためには、企業競争力を高めなければならない。その競争力を低めている日本型雇用システムを廃さなければならない。終身雇用などというようなものがみんなに保障されるなどということはあり得ない。年功賃金が保障されるのはほんの一部分でしかないのだ。正規雇用のみで企業が成り立つ時代は終わったのだ。日本人の賃金が高すぎるならアジアの低賃金労働者を雇って日本企業の競争力を確保すればよい。日本人の人権の高さが競争力を押し下げているのだ。＞

このような高圧的なメッセージが飛び交い、まさに驚くような社会改変が日本を、そして日本だけではなく世界をも襲い、先進国が先頭に立って労働者の人権や福祉の水準を切り下げる競争に走るという、驚くべき逆流が音を立てて流れ始めてしまいました。それが、規制緩和、新自由主義、競争こそ正義という声に他なりません。そして学生の皆さんは、そういう中で、少なくなった正規雇用のイスを獲得する競争に勝ち抜き、自分の存在証明を手に入れることを強く求められるようになりました。しかも今まで以上に「自己責任」という意識を伴って、すなわち生きられないのは、ワーキングプアになるのは自己責任だというメッセージを伴って。

しかし自明なことは、ワーキングプアに陥るのは自己責任ではないということです。非正規雇用を全労働者の三分の一を超えるところに押し上げるという雇用政策が推進されている以上、どんなにもがいても競争の下部3分の一に置かれる人は、非正規雇用に入らざるを得ません。それは個人の努力の欠落によって起きることではなく、社会政策、雇用政策の転換によって起こったことに他なりません。このことは、非常に明白です。今回のオリエンテーションで、なぜ湯浅誠氏の講演を企画したのかということも、このことに関わっています。

90年代後半、企業と国家の側から人権剥奪が、生活の安定性の剥奪が、一斉に展開され、社会の形が大きく変えられたにもかかわらず、日本社会の大人の多くは、そのことに気がつかず、低賃金非正規雇用や派遣労働と

Hosei University Repository

いうような人権後退をほとんど無抵抗に受け入れ、それを許容する制度を規制緩和の名の下に急増させてしまったのです。それはどうしてなのでしょうか。わたしたちの世代の自己批判の思いを込めて考えてみると、次のようなことが言えるように思います。

第一に、これから新しく雇用に入っていく青年の部分から、その権利剥奪が進行したことです。大人社会は、この問題を社会の変化によるものとしてではなく、自己責任問題として、すなわち青年自身の職業意識の低さや我慢力の喪失の結果、あるいは豊かな社会の中で青年期に起こるモラトリアム現象の一環として捉え、緊急に対処すべき人権問題、雇用の権利の切り下げとしては捉えきれなかったのです。だからむしろ今時の若者の弱さの結果として、捉えてしまったのです。

第二に、青年たちが正規雇用に入れなかったり就職できない矛盾、さらにそういう青年の困難を支える社会的なセーフティネットがない状況が出現しているにもかかわらず、当面は親にパラサイトする形でそういう困難が社会問題化しない状況が生まれました。しかし地域崩壊や08年の世界的な不況でパラサイトしている親の家計も打撃を受け、頼るべき親を持たないような青年が、一挙にホームレスなどに転落していく事態が急増し、若者が生きられない事態が出現していることが明らかになってきたのです。

第三に、日本の雇用の特徴といわれてきた日本型雇用（終身雇用、年功賃金、新規学卒採用）が、企業の側から放棄されたことに、多くの人が気がつきませんでした。1995年の日経連の「新時代の『日本的経営』」方針は、その転換の公然たる宣言でしたが、大人世代は、相変わらず正規雇用にはいることが一人前になることだと考え、そこに入れない青年の「だらしなさ」と「力不足」を責めるという対応をとってきたのです。

第四に、より根本的なこととして、高度成長期から一貫して、日本では、より豊かに生きる方法が、主要には「競争」となってきたことです。それはヨーロッパ先進国と大きく異なっていました。西欧福祉国家は、個々の労働者の競争ではなく、すべての労働者に高い生活水準を権利として保障する福祉の政治を積み上げてきました。政治的連帯によって安心して生きる社会を作り出してきたのです。例えばイギリスのように保守党と労働党が政権交代をしてきた国では、労働者階層は労働党が勝利することで、自分たちの連帯に依拠した政府を持つこともできたのです。ところが日本社会は、高度成長期以来一貫してより有力な企業に就職する競争、企業の中での出世競争によって豊かに生きるための競い合いを続けてきて、労働者同士の連帯を社会の政治的力として具体化する回路を奪われてきていた。その結果、正規雇用のイスが縮小されていったとき、連帯、福祉の強化によって自分たちの生活の安全を守る方法ではなく、より強い競争力を個人的に獲得して生き残りを計ろうとする労働者同士の激しい生き残り競争に向かっていったのです。

第五に、日本社会の福祉の特性が、突然の格差・貧困を生み出した背景にあります。日本では、ライフサイクルをわたっていくための支出——住宅、子育て、教育、老後の蓄え等々——は、正規雇用のみに与えられる年功賃金の右肩上がり部分でまかなわれてきました。ヨーロッパの場合、その多くが国家的な福祉の給付でまかなわれてきたので、給与が下がっても最低限度のライフサイクルをわたっていけるのですが、日本はそういう部分が個人の年功賃金に依拠していたために、年

Hosei University Repository

収200万円が続く不安定雇用が一挙に拡大すると、そういう人たちは一人前としてのライフサイクルをわたっていく経済的保障を受けられなくなってしまったのです。日本が、全ての人のライフサイクルを支える福祉システムを持たない「自己責任国家」であるという欠陥が一挙に貧困を出現させてしまう形で明らかになってしまったのです。

第六に、労働組合そのものの問題性もあります。日本の労働組合の多くが、企業内組合という形をとり、正規雇用労働者の労働権だけを守るという利己的性格を深く抱え込んできました。そういう枠の中で、多くの労働組合が、非正規労働者の権利確保を掲げてたたかうという精神を喪失していったということがありました。

最後に第七として、実はわたしたちはいまだに「国民国家幻想」にとらわれていたということを指摘しておかなければなりません。小泉元首相は、「日本の経済、日本丸が沈没しないためには、競争力のある企業が勝利をして、そこに豊かさが戻ってきたときに、やがて国民にその利益が還元されるのだから、いまは国民はこの痛みをともに分かち合わないといけない」という趣旨のことを言いました。しかし、企業が獲得した豊かさを国民に再配分するシステムがきちんと働いているのが「国民国家」だとすると、そういう国民国家経済体制をとっている限り、日本の企業が国際競争に勝利できないという判断に立って、日本は、国内に低賃金でワーキングプアとなって働く労働者を大量につくり出す道を選んだのです。「強い国」とは低賃金で働く労働者を大量に持つ社会格差の大きな国家であるというのが新自由主義の国家理念に他ならないのです。日本の企業が勝ち残る―― その意味での強い国家を作る―― には、国民国家経済体制を破壊して、国民の中に格差を広げていくほかないという道がすでに意識的に選択されているのです。にもかかわらず、日本経済が「困難だ、困難だ」という話のなかで、みんなが頑張って痛みを背負っていけば、そのうちみんな豊かになれるんだという形で、わたしたちはいまだに「国民国家幻想」に囚われていたということができるのではないでしょうか。

このように現代社会の構造を描いてみたときに、わたしたちが直面している課題は、60年間にわたる戦後期に作ってきた日本社会の到達点とその基本構造の弱点、そしてそれすらも乱暴に破壊されるような15年間をくぐり抜けて、もう1回本格的な人類の進歩の時代としての21世紀にふさわしい福祉と人権、人間が人間らしく生きられるような倫理と論理、そして社会のシステム全体をつくり直していく、そういう意味での「新たな福祉国家」づくりであると捉えることができるのではないでしょうか。

とするならば、人間としての生存権の確保のためには、すべての青年に人間らしく生きられる雇用を保障する社会の有りようを創り出すほかありません。個人のエンプロイヤビリティー（雇用可能性）を競争的に高めることのみによっては、決して事態は打開されません。競争という方法は、今の社会の根本問題を解決する方法にはつながらないという客観的な事態を冷静にみなければなりません。それは決して、個人が、労働者間の競争、就職競争に勝つことによって実現できる課題ではないのです。新しい社会を創造する努力こそが、社会のキャリアデザイナビリティー（仕事＝キャリアを含んだ個人のライフサイクルを主体的に切りひらいていくことができる社会的条件）を高めるのです。競争は万能

Hosei University Repository

ではありません。むしろ競争とは、現状の中で創り出された格差——底辺と上部の格差——に人を配分する仕組みそのものであり、加えてその配分は能力の差によるから正義であり、だから不利なところに配置されてもそれは「自己責任である」と断念させる機能、自分の惨めさを自己責任として受容させるイデオロギー機能を伴っているのです。

キャリアデザイン学部とは、この個人の力としてのエンプロイアビリティー(雇用されうる可能性)を高めることに一面化した学部ではなく、同時に社会のキャリアデザイナビリティー(誰もが人間的なライフサイクルを歩める可能性、生存権をすべての人に保障できる社会的条件)を高める道を、教員と学生とが協同探求する学びの場でもなければならないということを、わたしたちは学部の理念として実現したいと考えているのです。そのことをまず皆さんにお伝えしたいと思います。

(三) 意欲論——競争の磁場の中で意欲を管理されてきた人格

しかし、困難や課題は、社会の側だけあるのではないようにも思えます。ここでは、学習意欲の問題を考えてみましょう。今、率直にいって、大学生の多くが学習意欲を欠いています。なぜか。それは人間の意欲をあまりにも浪費させ、搾り取ってきた現代社会の仕組みに原因があるとわたしは思います。

小さい子どもは、頼りないけれども興味の固まりであり関心の固まりとして生きています。しかしその自分自身の興味や関心に依拠して、それに沿って生きていてはいけないというメッセージが小さい頃から与えられてきました。自分の存在証明をしたいのなら、値打ちをはかる基準として提示されているその価値をどれだけ蓄積できるかを示しなさいと。現代の子どもは、その提示された課題を達成できず、自分の存在価値を否定されることの恐怖にせき立てられて、激しい意欲を引き出され、物事に取り組ませられてきています。小さい子どもがなぜに自ら意欲しない勉強に激しく取り組むのかという秘密は、自分の存在証明を性急に求めるこんにちの競争社会の残酷さによっているのではないでしょうか。勉強は、受験勉強として、どれだけ自分の存在価値を証明できるかという自己のアイデンティティ実現のために取り組まれてきたのではないでしょうか。

しかしこの勉強は実に奇妙な勉強だったのではないでしょうか。本来学習とは、知識を獲得し、自分の力を蓄え、自分とは何かを明確にし、自分の生きる意味を明らかにする営みであったはずです。いやもっと根本的にみれば、勉強とは、学習したいテーマがあって初めて始まる営みではなかったのでしょうか。幼い子どもが持っていた無限の興味や関心こそ、学習を発動させる内的なエネルギーの源泉だったのではないでしょうか。

しかし<おまえの興味などとるに足らない。そんな私的な関心に捉えられていたのでは、まっとうな知識や技能は獲得できない。自分の関心を断念し、提示された課題に取り組め。それがおまえを成長させ、おまえの値打ちを高めるのだ>というメッセージの下で、外から提示された価値基準に沿い、その価値を体いっぱい詰め込むことで、自分の存在を証明しなければ生きられない状況に、日本の子どもが置かれてきたのではなかったでしょうか。外から与えられた価値をまとうことで、自分の存在を他者に、学校に、親に示すことによってしか、自分のアイデンティティを示すことができなかったのではないで

Hosei University Repository

しょうか。

そのような強い圧力の下で、幸いにも、皆さんは、かろうじて自分の存在証明に成功してきたかもしれません。大学に入学できたことはそういう存在証明の大きな証となったに違いありません。しかし、この大学にはいることに成功したと喜んでいる皆さんにとっても、もはや入学試験関門を突破してしまった法政大学での日々の生活空間は、皆さんのアイデンティティを証明する力を、機能を、急速に喪失していくだろうと思われるのです。

それはなぜなのか。それは皮肉なことに、大学自身は、生き残りをかけた競争の磁場がない空間だからです。確かに今、大学に就活という競争が組み込まれつつあります。しかし大学の成績が就活の「偏差値」として意味を持つわけではありません。今まで皆さんを何かの課題に熱中させ、それを首尾よく果たすことで自分を証明することができるような競争の仕組みが、皆さんの前から消えてしまうのです。それが大学というキャンパス空間なのです。競争という磁場を取り払われ、他から与えられる基準も、自分の存在を位置づける偏差値も無く、何を目的に生きていけるか、何を目的に学習をするのかということが皆さんに問われてくるのです。

しかし同時に、目的を強制されない、自分自身の内的な価値と目的に依拠してしか生きる意味を見いだせない大学という空間は、この競争的で絶えずおまえは何ができるのかと性急に問いつめる現代日本にあって、本当の自分を確立していくまたとない絶好の機会でもあるのです。生涯を競争に駆り立てられ、他者からの評価に追い立てられて生きることを拒否したいのなら、この「外」からの強制が一時的にせよ空白になる大学という時間と空間——人生でそういうものと出会えるほとんど唯一の機会——の中で、自分自身の紡ぎ出す価値と目的にしたがって生きるという主体性を立ち上げることが、とても大事なことになるのです。

(四) 学びのあり方について

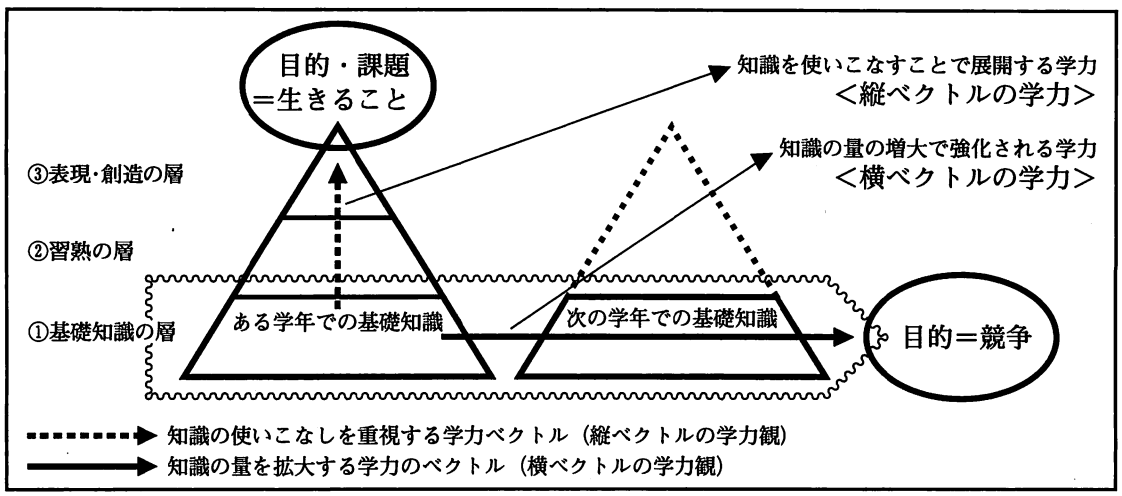
そのためには、今までの学びの構造を組み替える必要があります。それをわたしの言葉で説明すると「横ベクトルの学び」を「縦ベクトルの学び」へ転換するということなのです。

詳しく触れることはできませんが、わたしは学力を図の三角形のような構造で把握しています。学力の土台には知識・文化の修得(「基礎知識の層」)があります。その知識や文化を使いこなすことで知を成熟させ、また知を処理し創造的に組み立てていく思考力、想像力、表現力などを蓄積していくのが「習熟の層」です。それらの蓄積を生かして目的や課題と取り組み、創造し、発見し、表現する能動的な働きをする活動において中心的に働くのが「表現・創造の層」です。そしてこの3つの層を縦に貫いて、これらを統合し、目的や課題と取り組んでいくことで、学力の獲得が同時に主体的、能動的に生きていくことにつながる学力のあり方を「縦ベクトルの学力」と呼んでいます。

それに対して、受験で求められるのは、どうしても知識の記憶やある程度マニュアル化された操作力が中心になります。そして上の学年の学習内容まで先取りして知識を多く獲得した方が有利にもなります。なぜその知識を獲得するかについて、明確な目的意識がないまま詰め込み、テストでどれだけその記憶を引き出し、操作できるかで学力を証明することが求められ、学力競争の圧力が、「勉強」

Hosei University Repository

意欲を引き出すことになります。そういう方向性を持った学力が「横ベクトルの学力」です。「横ベクトルの学力」では、本格的な習熟の層や表現・創造の層が獲得されず、したがって自分の固有の目的意識や課題意識の発達が伴いません。なぜ学習をするのかは、競争から脱落することができないからという点へ一面化されていくのです。



次のような学生の声に、「横ベクトルの学力」の特徴が端的に示されています。

「わたしは、受験のために勉強してきました。そのため、大学に入ってからはやる気が出ず、遊び放題でした。今、また少しずつ自分の中で勉強に対する意欲が出てきています。しかしそれはきっと、今度は就職活動が始まるからだと思います。本当の意味で学習と目的が一致していないのです。今日先生の話を聞いて、まるで自分の話をされている気持ちでした。わたしは今、何のために勉強しているのか考えて勉強したら、何か変わるのでしょうか。日本はよく勉強しているとおっしゃっていましたが、その大半はわたしのように、受験のためか、親や教師にいわれて無理矢理やっているため、いつか日本は、学力低下を今以上に招くのではないかと思います。本当の学習をするためには目的が必要です。その目的はどのようにしたら見つかるのか、それすらわかりません。」（3年生）

ではどのようにして、「縦ベクトルの学力」へと組み替えるのか、それには自分の固有の目的を見いだすという新たな探求を開始する以外にありません。子どもの時、どの子どもも、関心の固まりだった、そういう自分、それを今、この青年としての日々に如何に回復することができるのかが問われているのです。しかし、先にも述べたように、おまえの関心など価値がない、一人前になって競争に生き残るには、自分の興味など切り捨てて勉強するほか無いのだという日々を強制されてきたとすると、この課題は非常に困難な課題となってしまうのです。

就職競争で、本当の大学の学びを活性化することはできません。それは、皮肉な言い方をすれば、いままで皆さんが体験してきた競

Hosei University Repository

争の中で存在証明を求められる受動的な生き方と連続することとなるでしょう。そこでは、たしかに、激しい就活競争が、皆さんの競争の意欲を再び活性化するでしょう。しかしそこに依拠するとき、しばらくの大学生活という休息と空白の期間の先に来るのは、新たな活力を皆さんの体から搾り取る過酷な競争に追い立てられる日々であるように思います。

これはずいぶん皮肉な言い方かもしれません。しかし言いたいことは皮肉ではなく、つかの間であるとしても競争から解放された大学時代を、それこそ誰からも強制されない、自分自身の関心とテーマを骨格として社会に独り立ちする絶好の機会として、生涯にわたる自分自身の存在証明を可能にする日々を紡ぎ出すその出発点としてほしいということを伝えたいということなのです。

ではそういう学びに進むにはどうすればいいのか。現実社会と他者への関心を発達させることが必要です。そこから自分にとっての固有の関心とテーマを紡ぎ出すことが必要です。それは、コンクリートと鉄筋の関係に比喩できるかもしれません。

大学の学びは、そのなかに自分のテーマを立ち上げないと構造化されていきません。コンクリートを流し込んでも建物は建築できない。鉄筋の骨格があって初めて、それにそってコンクリートが構造を積み上げていくことができます。多くのことをただ単位を取るためにバラバラに学んでも、すなわち鉄筋の構造がないままにいくらコンクリートを流し込んでも、主体的な知の構造は立ち上がっていきません。

個性とは骨組みの独自性のことだと言えるように思います。テーマ＝課題の独自性こそが一人ひとりの存在の固有性、かけがえのなさを証明するのです。個性とは決して奇抜性や、他者との差異性――したがってまた他者より優れていること――ではなくて、生きる上で避けられない自分の課題と取り組むことに他ならないと考えることができます。差異を示して他者に自分の希少価値を売り込むことが個性ではなく、自分自身が取り組まなければならないと考える課題と粘り強く向かい合う主体性こそが自分の存在の固有性を実現するのだと考える必要があります。

憲法第23条にある学問の自由、大学教員の研究の自由に限定されない、国民の一人一人が何が真実かを探求する権利を持っているという「知的探求の自由」の行使として、皆さんが自分のテーマを探究する学びこそが、皆さんのアイデンティティを実現するものとなるのです。

（五）コミュニケーション・民主主義・共同

しかしそういう学びを作り出すためには、大学の生活空間を、現代世界から大学が委託された国民的課題を思考し、研究し、その解決のために論争し、新しい社会を担う皆さんの世代の新しい協同を作り出す空間に変えなければならないと思うのです。

なぜなら、今、大学は、果たして民主主義と真理探究のコミュニケーションの場として機能しているかどうかが問われなければならないと思うからです。もし、今までの学習が、個々人がサバイバルする競争的努力の一環としての学習であったとするならば、その延長上に展開する大学の学びも、私的な生き残りを目指した学びにならざるを得ないでしょう。

問題の一つは、本当の自分を表現するコミュニケーションが衰退していることです。

Hosei University Repository

皆さんの表現力が低いとは思いません。いやむしろわたしたちの世代よりもっと繊細な微妙な表現感覚を磨いていると思います。そうでないとＫＹとしてハブかれてしまう不安と緊張の中で、「優しい」自分を演出すること、「優しさの技法」に心を割いてきたのではないでしょうか。しかしその「優しさ」は、本当の他者に対するやさしさ、他者に共感してそこから本質的な表現を引き出す優しさではなく、自分が孤立しないために、自分が相手に受け入れられるために他者にとって優しい自分を演出することを意味しているのではないでしょうか。この「優しさ」をみんなで演出しあう空間は、自分の気分に合わない他者の存在は許さないという意味で、他者への寛容と共感を欠いたものであり、本当の優しさとは正反対の性格を持った空間なのです。だからそのなかでの表現は、他者の好みに合わせて自分を演出することであり、そこに表現される自分は本当の自分ではないことになってしまうのです。だから本当の自分を押し隠して他者とつながるのが「優しさの技法」に他ならないのです。

しかし人が本当につながろうとするためには、それとは異なった表現が不可欠です。他者の思いを聞き取る、本当の優しさが求められているのです。中井久夫という方が、いじめの論理を次のように述べています。

中井久夫は、ジュディス・ハーマンの『心的外傷と回復』(みすず書房) の解説の中で、いじめの最も高度な手法が、「孤立化」「従属化」「無力化」「透明化」という戦略を持っていることを指摘しています。他者とのつながりを被害者からいっさい断ち切り、徹底的に孤立無援であることを思い知らせ、被害者にいっさいの反撃が不可能だと断念させ、被害者は加害者の意志に完全に服従して、「被害者は加害者を相手とする対人関係のみに生きるようにな」る。そして被害者は、自分の存在価値がないものと考え、「加害者に感情的に従属し」て生き、「いじめは次第に『透明化』して周囲に見えなくなる」というのです。その結果、被害者は、完全に主体的な表現を奪われ、加害者の意志に服していることを示す態度表明 (表現) 以外の表現がいっさい不可能となるのです。自分の無力と無価値を思い知らされるとき、表現すべきいかなる主体的アイデンティティも剥奪されてしまいます。そういう徹底した無力性、ましてやその下での継続的な暴力の体験は、被害者の主体性や能動性、表現を根底的に剥奪してしまうのです。そしてそういう性格が、多くの日常的コミュニケーションの性格に組み込まれているのではないかと思うのです。

人は自己の主体的な思いを載せたコミュニケーションによって、尊厳を保持した人間として他者とつながることが出来ます。そしてその協同のなかに自分の意志や思いを組み込み、公共的な意思の形成に参加し、そのことを通して社会的な主体としての有力感、有能感を獲得することができます。しかしこのような無力化を強いられる下では、ただ支配的なものへの自己の従属関係、無限に自己が抑圧される関係のなかでしか他者とつながることが出来なくなってしまいます。

そういう事態を克服していくには、他者に共感し、他者の表現を受け止めて励ますことが必要ですが、同時に表現者には、表現の自由を行使する勇気が求められることになります。しかしこの自由を行使する勇気は、今までの学校生活や友だち関係の中で、奪われてきたものです。例示すれば、①間違いをおそれることから表現を断念し、②目立つことから避けようとして他者と違う意見を言うこと

Hosei University Repository

を差し控え、③いじめや孤立の恐怖から強者や場の支配的雰囲気に屈服して自分を表現することを避け、④親に対しても「いい子」を演じる中で、自分の思いを封印し、⑤いうべき自分の意見を持たせない習慣の中で、表現の意欲すら喪失し、⑥さらに多数決民主主義の矮小な理解の結果、どうせ少数の異論を言っても結局多数の意見に決まるのだから、少数意見を出さない方がみんなの迷惑にならないという消極性までもが加わる――そういうマイナスの体験を山ほど背負ってきたままで、突然、自分の意見を言えといわれてもとまどってしまうのではないでしょうか。

孤立を避けるためのゲームが展開されている空間では、新しい考え、自分が感じた課題や疑問、批判をその場に投げ込むことができません。異質なもの、論争的なもの、批判を持ち込むことが躊躇されてしまうのです。そうすると、大学のキャンパスや教室は、ただみんなが当たり障りなく同調しあう空間となってしまいます。しかし大学に求められているのは、今求められている新しい社会の有りようを探求していくこと、現状を如何に批判的に捉えるかにあります。その批判は、他から持ち込まれるのではなく、皆さん一人ひとりの表現によって持ち込まれる他ないのです。異質なもの、異質な考え、それを一人一人が持ち込まない限り、大学の学びの場に論争は起こらないし、社会の矛盾につき刺さることもできないのです。批判することを恐れず、また批判されることも恐れず、批判を通して他者を高め、批判によって成長しあうような協同をこそ大学の中に作り出すことが、大学のキャンパスが、真に次世代を作り出す空間になるための、大学生としての学びの協同を作り出す基本の方法であることをしっかりと考えてほしいのです。

(六)「自分の大学」を立ち上げる

大学での学びを豊かに積み上げていくために是非考えてほしいことを述べておきます。

それは、皆さんが大学で本当に学ぶためには、二つの大学が堅く繋がれることが必要であるということです。

二つの大学とは何か。一つめの大学は、教員や施設や図書館などで構成される大学という場、あるいは学習条件として皆さんに提供されている大学、この法政大学という大学です。しかしそこにいるというだけでは、決して皆さんの大学生としての学びは立ち上がってこないのです。もう一つの大学を立ち上げることが必要なのです。

そのもう一つの大学を立ち上げるためには、一つには、皆さん一人ひとりが、自分の中に目的とテーマを紡ぎ出すことが必要なのです。二つには、一人ひとりを核としたコミュニケーションとつながりの場を創り、刺激に満ちた討論、批判と学び合いの関係＝場を自分のまわりに編み上げることが必要です。三つには、受動的に知識を蓄えるのではなく、創造と表現に挑戦し、主体的に生きていることの証としての固有の表現物、創造物を作り出すことが必要です。すなわち大学生活を、自らのテーマに基づいて探究する姿勢を持ち、絶えず自らを他者との論争と協同の場に押しだし、そのなかで、表現を通して新しい自己を創造し続けていく時間として生きていくということが必要なのです。それが、もう一つの大学を立ち上げるということなのです。

レポートも、教員に学習をしたことの証拠として提出するのではなく、自分のテーマと格闘しつつ「自己一身上の真実」を探究する皆さん方自身の固有の学びのプロセスの証

Hosei University Repository

拠、その過程から生み出される作品、マスターピースとして、全力で創造してください。

そういう自分を核として作り出す学びの構えと関係が、学生の皆さん自身が作り出す——皆さんが自分で作り出すほか無い——もう一つの大学なのです。そして大学における学びは、このもう一つの大学を自分を核として立ち上げることによってこそ、無限の可能性を持った創造的なプロセスとして展開し始めるのです。そのことによって、初めて施設としての大学や教員の講義の価値も皆さんのものとなることができます。自分の中にそれぞれの大学を、すなわちテーマという骨格（鉄筋）と、学びの主体的なネットワークを立ち上げ、自分自身を再創造していくという日々の挑戦の中で、大学は皆さんにとってかけがえのない時間となり場となるのです。そのことを忘れないでほしいと思います。

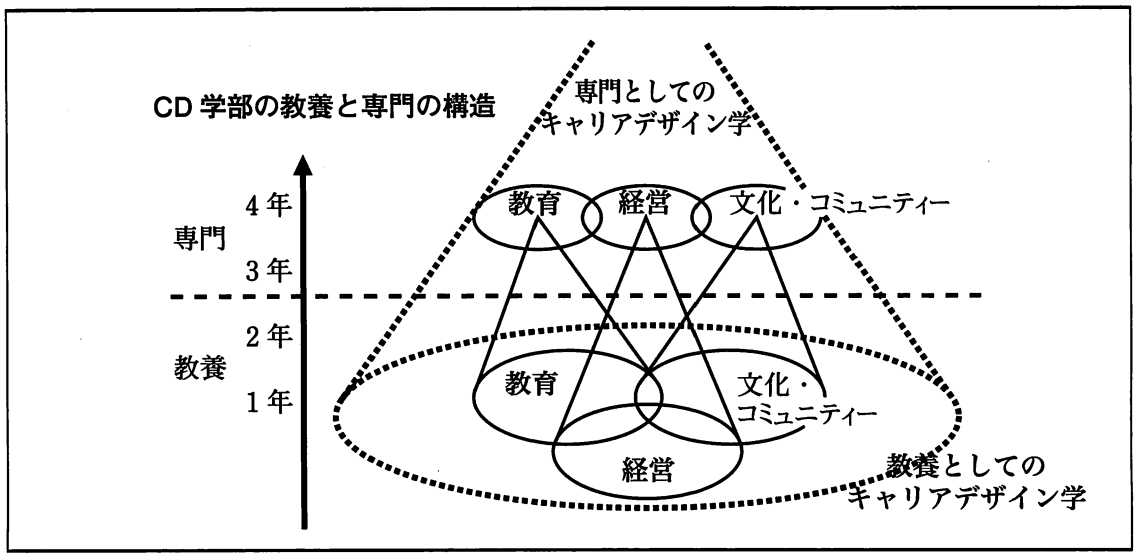
（七）４年間の学びのイメージを

最後に、このキャリアデザイン学部で、皆さん方が四年間にわたって学ぶということに関わるあるイメージをもってほしいということについて触れておきたいと思います。

それは、キャリアデザイン学という学部の性格にも関わることです。率直に言って、キャリアデザイン学の体系的な構築は未だ途上にあるといわざるを得ません。あるいは私達が構築しようとしているキャリアデザイン学は、教育学、経営学、文化・コミュニティ学の境界領域に育ちつつあるとも言えます。そのことを踏まえてキャリアデザイン学部の特徴をいうならば、教育、経営、文化・コミュニティ領域を交錯させたところにある基礎的教養としてのキャリアデザイン学を共通に学ぶことを通して人生のライフコースと社会参加の有り様を見定めつつ、専門段階においては、自らの人生選択・職業選択に沿って、より具体的に、教育あるいは経営あるいは文化・コミュニティ領域を意識的に選択し、そういう分野に通用する専門的な知識や技能を獲得することで、職業的社会参加への道を切り開いていってほしいということです。そういう教養と専門の構造をキャリアデザイン学部が持っているということをしっかり認識してほしいのです。

ですから、漫然とカリキュラムにある三つの領域を履修、学習していればそこに明確な特定の専門領域の知識が蓄積され、ある領域に焦点化された関心が発展していくと考えていると、焦点のない学びになってしまうということを知っておいてほしいと思います。

図でいえば、上に展開していく三角錐で表されている専門的関心と知識の発展は、一人ひとりが意識的に選択し、自らの関心の体系として構築しなければならないものだということをしっかり認識しておいてほしいということです。先にコンクリートに構造を与える「鉄筋」を組み立ててほしいといったのは、このことと結びついているのです。

今まで述べたような新しい構えを主体的に皆さんが作り出すならば、大学生活は、かならず皆さんにとって、新しい自分を発見し、創造していくことのできる時間と空間として働いてくれることを確信しています。そしてまた、そういう豊かな大学を皆さんと共に作り上げていくことが、わたしたち教員の希望であり、喜びでもあるということをお伝えして、新入生の皆さんへの、教員からのメッセージとさせて頂きます。

Hosei University Repository